

# 特別展

## “平塚の仏像”



木造地蔵菩薩坐像（中原地蔵堂）

---

期間 平成元年10月17日～11月12日

---

記念講演会 10月29日(日)午後1時～

講 師 跡見学園女子大学教授 三山進先生

テーマ 平塚の仏像

昭和55年以来、社会教育課が中心となって進めてきた市内各寺院の仏像調査の成果をもとに企画されたのが特別展「平塚の仏像」です。

この特別展では市内各寺院の仏像優品を所蔵寺院にご協力を願いし中世の仏像を中心に出展していただきました。この機会に、市民の皆様の地域文化財に対するご理解の一助となれば幸いです。

# 特別展 「平塚の仏像」 記念講演会

特別展「平塚の仏像」を記念して開催された講演会は、去る10月29日の日曜日、跡見学園女子大学教授三山進先生をお招きして実施された。

当日は、130名を越える人々が会場にあふれて、定刻15分前に始めねばならぬほどだった。

講演は、538年仏教公伝以後の仏教美術（仏像に焦点をあて）を概観しながら、平塚の彫刻像の一つ一つを、各時代の特徴を踏まえ、解説していただいた。その中で特に平塚では、まず正福寺阿弥陀如来立像に代表される定朝様を基調とした像が作られ、続いて中原地蔵堂の地蔵菩薩坐像や、高林寺大日如来坐像の運慶風を強く意識した優れた像が作られた。更に善福寺阿弥陀如来立像のような宋元風の作例が見られること、青柳院の滝見觀音のように、鎌倉文化圏の影響を受けた作例もあること等に言及された。

近世に入り、平塚の仏像を彫り上げた仏師達は、実は江戸、鎌倉、小田原地域の仏師でもあったことが指摘され、県内各地域の仏師の動向を知る上で、川崎市の事例と比較され、非常に興味深い話になっていた。

講演会は予定時間を大きく越え、熱心な講演会参加者と共に、一応の成功を収めたと実感した次第である。

## ・悟りの仏ー如来



## ・慈悲の仏ー菩薩



尊像各部の名称

## はじめて出会う仏さま



仏像事典ーはじめて出会う仏さまー  
(芦田正次郎著)より、仏像拝見の時の  
心覚えとして、まとめてみました。

### ・悟りの仏ー如来

釈迦は、シッタルダ太子の時に城の四門から出て老一病一死に接し、沙門(僧)の姿を見て妻子を捨て、修行の道に入った。苦行したが、改めて菩提樹の下に座してあらゆる邪念と戦い、遂に悟りを開いた。その姿は世間の欲を離れた証しに、一切の飾りをつけず、衲衣だけを身にまとっている。如来または仏という尊称の仏は、釈迦出家後の姿を写したもの。如来または仏とされる仏の数は、約70とか。毘盧遮那仏・弥勒・薬師・阿弥陀・大日など各如来。



### ・慈悲の仏ー菩薩

世の人を救わんとの大願を樹て、慈悲の願いを持った時の王子としての姿が菩薩。髪を結い上げ宝冠をかぶり、身にはきららかな装飾品をつけている。菩薩とされる仏の数は、約320。文殊・普賢・地藏・弥勒・観音・勢至など各菩薩。



### ・悪をこらす仏ー明王

仏像の多くは慈愛に満ちた表情を持つが、激しい怒りの表情を示すものもある。この怒りの仏が明王である。密教では如来が怒りの姿に変じたのを教令輪身とよぶが、毘盧遮那如来が大日如来として現われたその教令転身が、不動明王だと説かれている。すべての災魔を屈服させ、難行苦行に立ち向う修行者を守るという信仰が強かった。不動・軍荼利・金剛夜叉・大威德・愛染など各明王。

比叡山で二千日回峰を果した酒井阿闍梨の出発点も帰着地も比叡山中の無動寺明王堂であり、不動明王の灯明の火を提灯に移して、酒井阿闍梨は、深夜の回峰行を続けた由である。



#### ・地藏菩薩

安らかに物事を忍んで動かない意を「地」、静かに思いをめぐらし深く秘めるところを「藏」、あわせて地藏と言う。苦しみから救う仏。古くは安寿・寿子王が焼きごてで焼かれた時、その傷が地藏にうつった話、最近では水子供養に造立され交通事故で人が亡くなった所にたてられる。私たちも一番身近かな仏さまではなかろうか。



#### ・仏足石

インドで仏教初期に、釈迦があまりにも偉大であったため、お姿をあらわすのをばかって、樹木や輪宝・梯子や何重かの傘などで、その存在を示した。梯子は釈迦が忉利天から天降ったことを暗示し、日本の五重の塔の相輪は、かつて貴人の上にかざした傘の変形であろうか。

仏足石もその一つ。仏の足の裏を石に彫って、そこに仏の立ち姿を想像させたのか。あるいは、仏足跡とも表記されるように、仏の足跡を彫ることによって、その地に仏が来て歩いた、つまり「その地が極楽となる」との信仰が生まれたことを、この文字は示しているのかも知れぬ。

仏教がひろまり、西北インドのガンダーラ地方（パキスタン北部）に及んだ時、そこはすでにギリシャ・ローマ美術の影響を受けていたため、ギリシャ神像的な仏陀像が仏伝図に登場し、やがて独立像が生れるに至った。西暦120～130年といわれている。しかし仏像はインド北部マトゥラー（首都デリー南方の宗教都市）で生まれたという説もある。この地の仏陀像が、きわめて薄い布を偏袒右肩に着ている形であることも考証の一つだが、こっちの方は1世紀後期～2世紀前期の頃であったとしている。こうして仏教とともに、造像の信仰が伝わると、各地域に特色ある仏像が創られていったのである。

（和田）